

【研究論文】

言い難いものをとらえる
—イヴ・テリオーの『クマ使い』における名づける行為

Définir l'indéfinissable :
l'acte de nommer dans *Le Dompteur d'ours* d'Yves Thériault

佐々木 菜緒
SASAKI Nao

Résumé

Quand Yves Thériault se présente comme « conteur », cela ne signifie pas seulement qu'il s'attache à la tradition orale au Québec. Cela signifie aussi qu'il est un conteur universel qui a accompagné autrefois une tribu, qui a partagé des expériences, en même temps qu'il a créé des épisodes. Plus important peut-être, cela signifie également qu'il s'intéresse aux rapports entre le langage et la réalité qui sont établis par l'acte même de conter. Conter est en effet un acte de nommer les événements et les choses, car il permet d'organiser une expérience en une expérience accessible, compréhensible et communicable. L'idée que nous voulons développer dans cet article est que cet acte de nommer est essentiel chez Yves Thériault.

Pour ce faire, nous proposons une lecture de troisième livre d'Yves Thériault, *Le Dompteur d'ours* (1951), axée sur les procédés d'expression de l'évolution intérieure des auditeurs provoquée par la présence du dompteur d'ours. Ce faisant, nous voulons, en étudiant les réactions des personnages à cet étranger, montrer l'importance et l'originalité de « l'acte de nommer » dans l'œuvre d'Yves Thériault.

キーワード：イヴ・テリオー、『クマ使い』、物語る者、言語活動、名づける行為

Mots-clés : Yves Thériault, *Le Dompteur d'ours*, conteur, langage, acte de nommer

はじめに

イヴ・テリオール (Yves Thériault, 1915-1983) は、イヌイット社会を舞台にした小説『アガグック (Agaguk)』(1958) の作者としてよく知られているものの、実はケベック文学の地平において「最も定義づけえない」(Smith, 1980, p. 52) 作家としばしば評されることがある。その理由として、彼の物語にケベック文化や社会とのつながりを感じさせる要素(人物名、地名、思考や行動様式など)が希薄であり、他のケベックの作家とは容易に比較できないことがあげられる¹。「テリオールのエクリチュールはカナダの土地で湧き出たものではない」(Marcotte, 1950, p. 8) といわれるように、従来のケベックおよびカナダ文学にあまり見られない彼独自の主題や文体、作風で書かれているためである。この現象は、初期の作品すなわち第1作『孤独な者のためのものがたり (Contes pour un homme seul)』(1944) と第2作『醜い娘 (La fille laide)』(1950)、そして第3作『クマ使い (Le Dompteur d'ours)』(1950)² において顕著である。その中でも、『クマ使い』は、テリオールとケベックの文壇との距離をより広げることになった作品である。出版当時、未だ伝統的なカトリック色の濃く残る状況下での性やアニマリスム、官能といった主題面のほかに、章と章の間に連続性がなくまとまりに欠けるとして構造面からも酷評された (Lafrance, 1984, pp. 62-64)。

他方で、『クマ使い』をケベックの文脈とむすびつけて解釈する試みもみられる。たとえば、ジミー・ティボー (Jimmy Thibeault) は、作品が発表された1950年代という時代性、つまり伝統的なカトリック社会から近代化しつつある過渡期の側面に注目して、社会における自己のあり方、その再定義づけを示唆する作品だとする。かつて批評家を困惑させた諸々の主題は、彼によれば、登場人物が各々の自己の在り方を見つめ直し、社会的役割を真に手にするための手段ととらえられる (Thibeault, 2019)。しかしながら、なぜ性やアニマリスム、官能の主題、すなわち肉体に関わる主題がテリオールにおいて重要なのかといったことについての議論がなく、表面的な考察に留まっているといわざるをえない。もう少し、それぞれの主題がどのように描かれ、登場人物の自己がそれらをどのように認識しているかの過程を詳しく見る必要があるのではないだろうか。

以上のような疑問に端を発して、本稿では、作品のタイトルにもなっているクマ使いの存在がほかの登場人物にどのような影響を与え、彼らの内面に

どのような変化を起こしているのかを、それぞれの認識過程に注目しながら、分析読解する。村人たちはクマ使いを目にして自身の内部に「何かを感じとる」。その「何か」は各々の仕方にとらえられようとしている。その有り様は、自身の経験や生を名づけようとする行為を思わせる。この種の名づける行為は、野家啓一（2005）が『物語の哲学』で考えるように、諸々の出来事が物語られる中でなしえるものである。本稿が、クマ使いの村人たちへの影響を考察する中で引き出したいのは、この名づけるという行為の様態である。それぞれの影響や変化はどのようにとらえられ、表現されているのだろうか。

本論に入る前に、簡単にあらすじを確認しておきたい。物語は全15章で構成されており、とある山間の村にエルマン（Hermann）と名乗るよそ者がやってくる場面からはじまる。彼は素手でクマと戦うという。村の人間には見られないエルマンの異様な姿（筋肉質な体つき、じっとりとした歩き方、力強くしなやかな声、濃い黒髪など）に村人たちは惹きつけられる。エルマンの存在に刺激されて、ある者には肉体の欲望が生まれ、別の者には外の世界への憧憬が、またほかの者には嫉妬などさまざまな感情が芽生える。クマ使いの村人への影響は直接的な場合もあれば、間接的な場合もあり、村全体が何かしらの影響を被っていく。その影響を受ける3日間の様子が、各章において概ね一人から二人の人物に焦点が当てられながら、三人称で語られていく。

1. イヴ・テリオールにおける言語活動——人間の生を名づけること

本稿をとおして考察したい「名づける行為」は、テリオールにおいてどのような意味をもつのだろうか。名づけるとは言語活動の一つであるが、テリオールにとって言語活動あるいは書くことはどのような存在なのだろうか。まずは彼の経歴を概観しながら、この点を見ていこう。

物書きとしてのテリオールの経歴で重要と思われるのは、経済的理由で15歳のときに中学を中退したために、独学で歩んできたことである。そして、生活の糧を得るための手段として書いてきたことである。20世紀前半、多くの若い作家は『ラ・ルレーヴ（La Relève）』のような文芸雑誌の活動に携わりながら、文壇での居場所を築いていたが、早い時期から知的文化との接点を失っていたテリオールには、文壇と交流するためのいわゆる文化資本も長い物語を書くために必要なフランス語の知識や技術も持ち合わせていなかった（Lafrance, 1984, pp. 25-27）。1935年以降、モンレアルやニュー＝カルライル

(New-Carlisle)、リムスキ (Rimouski) やオル (Hull) などのラジオ局でアナウンサーや原稿編集を務めていたことがきっかけで、ラジオ用の短い物語 (sketch radiophonique) を書きはじめる。そのとき、ことばの面での無知にとっても苦しんだという (Thériault, 1969, p. 11)。言いたいことはあるが、どのように言うのか。その中で、複雑な筋書きや凝った修辞法でできた息の長い文体ではなく、簡潔で率直な表現を可能とするような、自分だけの文体を編み出した。テリオーの語りに口承性が強くみられ、そして彼が初めて世に発表した作品が、民話や昔話に着想を得た物語形式である「ものがたり (conte)」であるのは、このように文化的に恵まれているとはいえない境遇およびラジオということばの音が中心の媒体の中で書く中で培った術でもあったといえる³。

そして、テリオーが自らも「物語る者 (conteur)」であると繰り返し主張する際 (e.g. Thériault, 1969, p. 28; p. 35; p. 36)、そこには文壇との距離を彼なりに定めようとする姿勢があるように思われる。物語ること (conter) とは、古来人間生活の営みの中で「経験を伝承し、共同化する」(野家、2005, p. 83) 言語活動であり、普遍的な意味をもつ⁴。そのようにみると、物語る者であることは、テリオーにおいて、さまざまな制度や言説から自由である状態を、つまり彼の作品がケベック文学の視座だけではとらえられない状態を根拠づけてくれるのだといえる。ただ、従来において、テリオーにおける物語る行為は、たとえば読者に話しかけたり物語に介入したりする語りの調子といった、口承的な意味での物語る術 (art de conter) に注目されながら、ケベックの口承文化の遺産とむすびつけて解釈される (e.g. Major, 1983; Beaulieu, 1996)。だが、テリオーが物語ることをとおして、人間生活の営みを普遍的にとらえることに関心をもつのであれば、語りの口承性などの表面的な点だけでなく、作品の中で実際に営まれているもの、つまり主題との関わりを掘り下げる必要があるのではないか。

実のところ、ジャン＝ポール・シマール (Jean-Paul Simard) は、『イヴ・テリオーにおける儀式と言語活動』(*Rituel et langage chez Yves Thériault*) (1979) の中で、テリオーの作品における登場人物と言語活動の關係に注目し、そこから人間と世界を關係づけるという原初的な言語機能を引き出している。彼によれば、テリオーの作品には、「故郷の人々や物事を、しぐさで〈言い表す〉ことや、ことばで〈名づける〉という意志」がみられ、何人かの登場人物には、「そのような仕方で現実に到達したいという根強い欲望」

(Simard, 1979, p. 13) が備わっている。シマールの研究は、人間と言語の原初的關係という観点でとらえ直している点で、従来において、多くの作品で先住民が主要人物として書かれていることから、白人文明以前の未開あるいは郷愁的な意味合いで解釈されるテリオーの原初性に新たな光を当てている⁵。ただ、分析対象が、基本的に自然風景がひろがるいわゆる原初的環境に置かれた人物の登場する作品であるように、シマールにおいても原初性は現代社会が失ったものを含意している。一方の本稿においては、より言語活動そのものに注目しながら、テリオーにおいて書く＝物語するという行為がどのように、野家 (2005) が考えるような、人間の存在の仕方を根源的かつ普遍的に問うための営みであるかを明らかにしてみたい。

その上で、『クマ使い』との関連で加えたいのは、このようなテリオーの「名づける」意志は、人間自身にも向けられていることである。つまり、人間と人間を取り囲む自然環境との関係という図式の中で限定されるような人間存在ではなく、一つの肉体である人間という存在への関心である。一人の人間が感じとる感情や情緒、欲望もまた人間の現実であるが、それはどのように名づけ、存在化することができるのか。『クマ使い』にみられる性に関わる諸々の主題は、そのような問いかけを有するもののように思われる。実際、テリオーはインタビューの中で次のように、肉体に関わる主題を抜きにして人間の生を語ることはできないと述べている。「食べることや働くこと、愛することは人間にとって基本的な3機能です。人間生活においてセクシュアリティが有する因果関係を否定することは、ケベックの人々でさえも、生そのものを否定することです」(Thériault, 1969, p. 30) と。性について書くことは一つの肉体である人間の生を立体的にとらえることを可能とする。テリオーが書く登場人物が行動的で実践的で、活力や生命力に溢れているように、彼にとって人間とは諸々の行為をなす文字どおり実体的な存在だといえる。そして、そのような存在を彼は名づけようとしていると考えられる。この点を次章以降詳しく見ていきたい。

2. 肉身としての人間をとらえる

性や死への衝動、さまざまな情動に彩られたテリオーの物語世界は、理性よりも本能で行動するような原初的な世界だとされることがある (Marcotte, 1950; Bessette, 1968)。しかしながら、テリオーが書く登場人物はかなり思考する者たちである。シマールが指摘するように、テリオーのテキストには

「ことば (mot)」という用語が頻繁にみられ、一つの「ことば」は登場人物にとって一つの概念を表し、彼らにとって未知のものと既知のものと境界線を具象化する (Simard, 1979, p. 21-22)。登場人物は自身の経験や感情を言語化し、それを現実として受容するためのことばを獲得することを試みているのである。『クマ使い』においても、よそ者のエルマンの影響によって生じる諸々の現象や経験を言い表すための「ことば」が問われている。

たとえば、物語の冒頭のエルマンが村に登場する場面を見てみよう。エルマンは、村の中心の教会の隣に位置するデュムラン (Dumoulin) の店に向かってやってくる。その様子を店にいる村人たちが窓から眺める。

— 奇妙にもできあがってるわね、この男の人、と商人デュムランの妻リュット (Ruth) が言った。

— ぼくがちょうど考えていたことだよ、とノルベール・ジュバン (Norbert Jubin) は言った。おもしろい体つきだ。

ブレスール (Bressart) の妻が人だかりをかきわけた。

[…]

— 頭越しにちょっと見たとき、町にいた誰かに似てると思ったの。でも、彼じゃないわ。こっちはもっとずっと …

— もっと太め、とカビラン (Cabirand) の妻、美人のジュヌヴィエーヴ (Geneviève) が言った。

— いいえ、もっとたくましい、とリディア (Lydia) が言い直した。もっとたくましい。そういうことよ。たくましさ。

彼ら全員を引き留める何かが、この光景に彼らをつなぎ止める何かが、彼らのことばをとらえる何かがあった。突然の非現実のように。(pp. 7-8)

この場面では、村人たちが代わる代わるよそ者の外見を描写するために、自分たちなりに適したことばを見つけようとしている様子が印象的である。引用の最後で「非現実のように」という表現があるように、彼らは経験したことのないこの現実を理解しようと、ことばを交わしている。

また、この引用から分かるように、村人は筋肉質なエルマンの姿に魅了される。「あの筋肉の塊」(p. 4)であるエルマンの肉体は、女性の登場人物の中に、肉体的な欲望を引き起こしていく。その様子は、一見すると理性を失って本能に流される人間のようなのであるが、本能というよりも、肉身としての自己を認識していく人間のようなのである。そして、上記の引用でも用いられてい

るように、登場人物の身に起こる変化はしばしば「何か (quelque chose)」ということばで描写される。「何か」であるということは、まだ名づけられていないものである。そして、その「何か」とは何かをとらえる試みがまに行われている。

肉身としての人間像を描き出す試みとして、「筋肉 (muscle)」に関わる表現が頻繁に用いられていることに注目できる。実際、エルマン像には「筋肉質な (musclé)」および「筋肉 (muscle)」ということばが付着する (p. 3; p. 16; p. 22; p. 27; p. 82; p. 98; p. 266)。そして、エルマンの筋肉は、性的なものを象徴するだけでなく、文字どおり筋繊維でできた肉体そしてその動性、生気をあらわしていると考えられる。同じような表現が、登場人物の変化を語る際に用いられており、エルマンの筋肉を目にして、身としての自己がとらえられていく様子を読みとることができる。

具体的に、40歳の独身リディアの身に起きる変化を見てみよう。敬虔な彼女は、肉欲を抱くことで「動物のようになる」(p. 14)ことを危惧し、そして周囲がそのことに感づくのを恐れて、強く自制する。しかし、自宅にキャベツを運んでくれた青年ルバン (Lubin) の瑞々しい肉体の样に感化され、自分の中で「何か」が起きるのを感じとる。「何かが彼女の中で花開いていた。咲いていく花のように、むき出しの筋 (すじ) と張りつめた筋 (きん) にかすれるときのように、お馴染みのあのやわらかな押す力が身にもたらすときのように。盛大に開花したいというあの突然の欲求」(p. 157)。花が開いていくイメージの中でとらえられようとしている「何か」は、花びらの精妙な「筋 (nerf / musculé)」をとおって、いわば全身全霊で花びらを動かす力である。その力は見えないが、諸々の「筋」の張りつめた様子をとおして、その力の存在を感受することができる。この描写から、情動が「筋」をつたって身に一種の緊張状態を生みだしていることが読み取られる。そして、象徴的なのは、「そうして彼女 [リディア] は彼 [ルバン] の目の前にいた、曝けだされた心、しぐさをみれば相当分かる動揺、こわばった体、困惑した表情」(p. 158)とあるように、開花で喩えられた「力」がリディア自身の「筋」をとおって、実際に体が動く、表情や行動としてあらわれていることである。結局、ルバンが逃げたことで事なきを得て、リディア自身も我に返る。こうしたことは、確かに本能に突き動かされて一瞬理性を失った人間を思わせるだろう。ただ、その様子が明らかに緊迫したものであるように、本能と理性は拮抗している。肉体全体がその拮抗の表現の場となっていると

いえる。

そのようにみると、エルマンの筋肉質な肉体に異常にこだわる別の人物が、リディアのように、普段物静かで感情をあまりあらわにしない人物、つまりロック・レルベル（Roch Lerbel）であることは興味深い。夫婦の営みに積極的でなかったロックは、20年前、妻クレマン（Clémence）が知人ドルメール（Droumaire）と浮気する現場を目撃する。その後、積極的になるという変化があるが、浮気された遺恨、とりわけ妻を虜にした男の肉体への嫉妬心をとくに表面化してこなかった。しかし、エルマンの筋肉は、ロックの心の中に、立派な体つきのあのドルメールの存在を想起させ、反対に自分の貧相な体つきを認識させる。以下は、エルマンがやってきて2日目の晩、ロックの内部でいわば抑圧していた感情がとらえられる場面である。

それは見えなかった。

それは聞こえなかった。

ロック・レルベル自身以外、ほかのだれもそれが存在しえることは知らなかった。

なぜなら、これらのことはロック・レルベルの心の中で起きていたから、彼の自己の深いところで。それは彼の理性と想像との間で争っていたのだ、彼の自制、心配、おおかた判断と呼ぶことのできる何かと今では過敏になった筋（すじ）との間で。（pp. 255-256）

ここでも筋肉に関わることは「筋（nerf）」が使われていることに気づく。それは、「理性と想像」という関係でいえば後者に属している。想像と身体的な緊張が一体化している様子が描かれている。その中で注目したいのは、「彼の自制、心配、おおかた判断と呼ぶ事のできる何か」とあるように、理性的にとらえられるものの輪郭がむしろ曖昧で、過去の浮気をめぐる感情は「過敏になった筋（すじ）」として、つまり何かしらの形のあるものとしてとらえられていることである。その場合、ロックにとってより確かなものは、自身の体が感受するこの緊張であり、様々な刺激に反応しようとする力である。そして、リディアが行動に出たように、ロックも銃を携えてドルメールの家に行くという行動をとる。ロックは自分の脳内に張りついた浮気場面の残像を抹消するために、ドルメールを殺害しようとするが、これも事なくて済む⁶。

以上のようなリディアとロックの似通った顛末は何を表しているのだろうか

か。共通しているのは、普段は表面上何もないかのように取り繕う人間において、よそ者の異質性に刺激されたことにより、その取り繕いの糸が切れる様だといえる。テリオーは、人間の肉欲をめぐる本能的な部分を書くというよりも、表面にはあらわれない個人の欲望や内的葛藤がどのように人間の「身」の一部であり、「身」に変化をもたらしているのかを浮き彫りにしながら、あくまで生身の人間を立体的にとらえることを試みているのだろう。

3. 世界を形づくる行為としての名づけること

前章で見たように、エルマンの肉体、とりわけ筋肉という体の一部が村人に強い印象を刻んでいる。実のところ、エルマンという人物像は、その筋肉質な腕、黒い縮れた髪の毛、重みのある声、不思議な訛りとだけが繰り返し描写されており、断片的である。彼の素性について分かるのは「わたしはエルマンといいます、クマと闘います」(p. 10)と名乗ったのがほぼ全てである。ティボーの表現を借りれば、「クマ使いはある種のパラダイムが欠けた存在として、馴染みの特徴のない人物としてあらわれており、その空白を各自が埋めようと努めている」(Thibeault, 2005, p. 173)。エルマンというよそ者にたいして、それぞれの人物が個別に解釈し、意味づけをしている。各々の欲望がエルマンに投影されているのである。そうした様子からは、「理解不可能なものを受容可能なものへと転換する」(野家、2005、p. 316)ための物語る行為、つまり世界を名づけるという行為を読みとることができる。『クマ使い』では、登場人物にとっての世界とは山に囲まれた村である。その村という世界、つまり村の人生が名づけられていく。この点を詳しく見ていきたい。

よそ者のエルマンが表象するのは、何よりも外の世界である。エルマンの存在によって、複数の人物は「出発する (partir)」ことを意識するようになる。たとえば、彼に第一夜の寝床を提供したシルヴァン (Sylvain) の妻ジュヌヴィエーヴは、さまざまに移動することのできるエルマンに自由を見出して、村を立ち去るとき一緒に付いていくことを望む。彼女にとって村の生活は隅々まで予測でき、「目的のない人生」(p. 33)である。このように、ジュヌヴィエーヴにおいては人生に名前がついており、彼女は自分が何を欲しているかを認識している⁷。

それにたいして、14歳の少年ルイ (Louis) はまだ自分の望むものが未知である。「しかるに、ルイにとって、ヴォワロン (Voiron) のちびっこにとっ

て、いろいろな欲望には名前がなかった。それらは雑然としていて、ふらふらしていた。それらは入り混じって、重なり合っていた」(p. 49)。ルイには大物になって注目を浴びて世界を支配したいという野望があり、日頃から体を鍛えているが、その道が具体的に分からない。ただ、「ルイはそのことばを知らなかったが、その状態の意味は分かっていた。作られた道の上を進むことだけは嫌だということを。世界の方へとつづく、広い道ではなく、狭く曲がりくねった道。一周回ったら出発点に戻る道」(p. 54)。村全体の注目の的になり、とくに女性陣を虜にするエルマンの存在は、そのようなルイにとって、歩むべき道を示すものとなる。ただし、この聡明な少年はエルマンのたくましさが見かけに過ぎないことを見抜いている。その意味で、「いや、奴のようなのは違う」(p. 51)と言うとき、彼は自分の人生の道を象徴的に名づけているといえる。つまり、「エルマンのように」強さを売り物にして世界を渡り歩く人生であり、「エルマンとは違って」真に強い者として生きるということである⁸。

人生を名づける試みは、ヴェロニク (Véronique) の場合にも認められる。10年前、彼女は25歳のとき、当時すでに還暦を過ぎていたレミ (Rémi) と結婚した。高齢の相手だったため甘美な夫婦生活とは無縁で、また腰痛持ちの夫に代わり、日々の重労働はヴェロニクが一身に引き受けていた。そのような中で、あのたくましい肉体をしたエルマンを目にしたことにより、彼女は自身の女としての失われた人生を認識する。以下は、結婚初日からずっと腰痛を訴え、泣き言ばかりのレミへの怒りが爆発する場面である。

それから彼女〔ヴェロニク〕は叫びながら繰り返した。

— どうして？

けれども、彼〔レミ〕には分からなかった。答えが要った、思い出が、もしかしたら、何年も前の、それが始まった日にきちんと名前をつける必要があった。

けれども、それは浮かんでこなかった。名前がついていなかった。漠然としていた、輪郭も名前もなく、曜日も日付もないはるか彼方だった。(p. 95)

この場面では、明らかに、不可解な現状を理解するために、その原因の所在としての「名前」が模索されており、テリオーにおいて「名づける」として現実を受容することと同じ意味であることがうかがえる。しかし、「輪郭

も名前もなく、曜日も日付もない」ということは、そもそも始まりがないということであり、始まりがなければ、とらえ難いものである。そして、答えられないレミにたいして、ヴェロニクが次のように発しながら、人生とともにレミという人間を名づける。「わたしがおまえに言ってやるわよ、怠惰だって！これが禍なのよ。ほんとうの禍。神さまからじゃない禍、おまえからよ」(p. 96) と。不幸の原因がレミ自身の性格、彼という人間の存在に見出されている。

以上の分析の中で確認しておきたいのは、登場人物の人生が彼ら自身のことばで、実際の言語活動の中でとらえられており、それぞれの人生が名づけられることをとおして、現在とは異なる別の人生が意識されていることである。村と外の世界、現在のあり方と別のあり方の間の境界線が生まれている。というのも、物語る＝名づけることで世界が形づくられる場合、それは形づくられた世界（こちら側）とそれ以外の世界（あちら側）の境界線がつくられることを意味するからである。「物語が世界の限界である」(野家、2005、p. 324)。そうして、世界を名づける中で露わになるのは、とらえられるものの限界である。テリオーの作品から引き出される人間と言語との関係の原初性とは、このように言語の営みそのものに内在した限界という点からみえるのだ。この点をさらに掘り下げるために、次章では、登場人物とことばの関係に焦点を当てて考えてみたい。

4. 人間関係におけることばの機能

これまで見てきたように、テリオーは『クマ使い』の中で、よそ者のエルマンの影響を受ける村人の変化を物語りながら、人間存在の有り様や営みをさまざまに名づけることを試みている。そのようにして、人間の言語活動の様態が描きだされているといえる。加えて、エルマンの影響は、別の人物の場合では、言語そのものとの関係を問い直すよう作用していることにも注目したい。その様子からは、人間と人間関係を形づくるものとしてのことばの機能が読みとられる。

『クマ使い』にあらわれる人間とことばの関係といえば、まず12歳の少年クレモン(Clément)の場合があげられる。彼は病弱なため家にいることが多く、ときどき学校に通うものも、読み書きは不十分である。ただ、「彼が知っていること、それにはことばは要らなかった、紙に描かなければならない数や文字は。彼は鳥の鳴き声や空の色を知っていた」(p. 134)。明らかに、クレ

モンは無垢や純真を表象し、ことばは知をあらわしている。その中で注目したいのは、クレモンにおける「狩り (chasse)」ということばの意味の認識過程が描かれており、一つのことばの獲得が象徴的に人間関係を形づくり、その関係に確執を生んでいることである。具体的には、狩りをする父親と森に行くことに憧れている少年にとって、当初狩りをするには森に行くことだけを、つまり森という自然のある場所へ行き、野生動物を愛でることを意味していた。森に行く前の晩、カビラン宅へ向かう噂のエルマンに出会い、彼に森に行かないほうがいいと言われる。「おまえにそう言うのは、むしろおまえが狩りをするのが何を意味するかを知らないからだ」(p. 137)。そして、当日、美しい鳴き声をした鳥を撃ち殺す父親の姿をとおして、狩りすることが非情な殺戮行為であることを認識する。「狩りというのは遊びなんだ。殺さなければならない。森で狩りをするっていうのは、動物にむかって引き金をひくこと、殺すことなんだよ。そのために狩りをするんだ」(p. 146)。クレマンはエルマンの忠告の意味を理解し、その後父親と森に戻ることを拒む。

一見すると、この物語で描かれているのは少年のものの見方の変化であり、父親に反抗する息子の姿である (Thibeault, 2005, p. 184)。ただ、ことばとの関わりで見た場合、親子の間の亀裂が「狩り」の意味をめぐる起きていることは重要だといえる。クレモンの中で「狩りをする」ことは「森に行く」ことから「殺す (tuer)」ことへの意味に変わり、その意味の変容によって、自分の世界と父親の世界が違うことが認識されている。境界線が作られているといえる。また、「狩り」の意味の認識に、快楽のために無辜な生き物を殺すという人間行為の認識も伴っていることも指摘できる。まるでことばの獲得とは人間性の暗部を蓄積していくことでもあるかのようである⁹。

ことばが象徴的に人間同士を分離していくような現象は、次に取りあげるジュバン兄弟 (Frères Jubin) でも見られる。ことばの存在は、それぞれ独立して思考する人間と人間の関係性を描く装置としてあらわれている。兄ノルベールと弟リュック (Luc) はクマをつかまえて、毛皮や肉を売って生計を立てているため、クマ狩りは彼らの得意とするところである。そして、エルマンに、闘うためのクマをつかまえることを約束する。この兄弟は双子のように似ており、「二人の男で、一つでしかなかった」(p. 166)。お互いに同じように考え、お互いが相手の考えていることが分かる彼らの間にことばは不在である。いつものように「話し合うことなく」(p. 172)、順調に罠をしか

けてクマをつかまえる。しかし、リュックの中に疑念が生まれる。それは、「このクマをエルマンのために村に連れて帰って、エルマンが闘うことによって、自分たちにどんな利があるのか」というものである。クマと闘って儲けるのは当のエルマンであり、闘った後の傷ついたクマは売り物にならない。「彼らの人生で初めて、物事は説明されなければならなかった」(p. 178)、つまり「なぜこのクマを連れて帰るのか」、「クマを連れて帰る」という行為を説明づける必要性が生じる。その行為の意味をめぐって、兄弟は言い合いになり、取っ組み合いになる。「クマを連れて帰る」ことは、リュックにとってはエルマンに踏み台にされることであり、ノルベールにとっては約束を守ることである。クマを連れて帰ることは、リュックは「愚か」(p. 180)で「間抜け」(p. 181)だといい、ノルベールは「名誉」(p. 182)に関わることだと言いつつ。そのような彼らにおいて、明らかに、ことばの発生は個人と個人を対立化するよう機能している。ことばの出現と兄弟それぞれの個別化、対立が同時に起きている。

テリオールは、二人の兄弟の間に生まれることばの存在をとおして、ことばを持つということは個々に思考すること、自身の考えを持つことであることを象徴的に描いていると考えられる。ことばは、各々が各々の仕方で世界を意味づけ、秩序づけるためのものであり、自身と他人を区別するよう機能する。そのように見ると、テリオールにおいてことばは理(ことわり)を具象するような存在だといえる。一人一人に理があり、一人一人に整えられた世界がある¹⁰。そうした個々の人間、個々の理の集合体で成り立つ人間社会の有り様を、『クマ使い』の中で、円の中心のようにエルマンという人物を据えながら、浮き彫りにしているのではないだろうか。

おわりに

『クマ使い』という作品は、一言でいえば、よそ者の存在に翻弄される村人の様子を描いた群集劇である。よそ者は、千編一律な暮らしを送る社会において、各自の中に封じられていたものを刺激して表出させる起爆剤のような存在である。そして、本稿をとおして見てきたように、それぞれの人物に作用する影響や変化がどのように認識され、言語化されていくかの過程が物語の舞台である¹¹。その場合、エルマンの正体はそれほど重要ではないだろう。第3章で述べたとおり、この謎の人物をどのように解釈し、意味づけるかが重要であり、そのような言語活動の様態に作者テリオールは関心をもって

いるといえる¹²。未知のものを目にしたときの人間の反応、想像力を描いている。さらにいえば、理解できないものをどうにかして理解したいという人間の本能的な営みを書いている。

また、エルマンのたくましさに村人が魅せられている様子は、人間がいかに目に見えるものに囚われているかを浮き彫りにしている。エルマンが「クマと闘う」と言う一方で、村人は具体的にどのように可能なかは分からない。ただ、このクマ使いだという男の不思議な歩き方やしぐさ、筋肉質な肉体がその可能性を裏づけているように「見える」のである。その意味で、村人は、エルマンが作りあげた「クマ使い」の表象に囚われた人間の姿だといえる。「クマ使い」という肩書きは、そのことばからイメージされる肉体と肉体がぶつかる様子とは対照的に、実体のない空虚な意味だけである。実体のない意味に囚われ、見えないものを見ようとする人間の欲求を、『クマ使い』をとおしてテリオールは書いているのだろう¹³。

このように、テリオールにおいて書くことは、人間であること、人間存在の様態を普遍的かつ根源的にとらえることである。彼が書く作品には確かにケベック的だと思える面が少なくかもしれない。しかし、作家自身のことばを引き合いにだせば、「[...] 私が話すのは、自分が感じて分かる物事や人々のことだけです。自分にとってとても強いつながりを感じられるもののみを話題にしています」(Thériault, 1969, p. 26) とあるように¹⁴、彼自身がよく知るケベックの土地に生きる人間の生活風景を、俯瞰的ではなく、その者たちと同じ地平から書いている。「物語る者」としての作家テリオールは、そのような視座で理解されなければならないだろう。

(ささき なお 明治大学)

付記 本研究は JSPS 科研費（若手研究）研究課題 24K16031 の助成を受けたものです。

注

- 1 テリオールの作品舞台は、『アーロン (Aaron)』(1954) のように町であることもあるが、そのほとんどが村や集落 (hameau)、山間や平野、森や川のある自然豊かなところである。ただ、テリオールが書く自然風景は過酷で容赦なく、人間の知性や能力を超えた、統制不可能なような存在であることが多い。そのよう

- な自然は単純に都会や文明との対比関係の中でとらえられるのではなく、むしろ人間の存在する環境を原初化、いわば抽象化したような空間である。
- 2 本稿では、テキストの引用は *Le dernier havre* 版 (Thériault, 2005) に準拠し、ページ数のみ示す。
 - 3 ここではとくに、1941年に週刊紙『ル・ジュール (*Le Jour*)』に発表された作品のことを指している。同雑誌に掲載された作品はその後、『孤独な者のためのものがたり』の一部としてまとめられて、出版される。
 - 4 テリオール自身も、インタビューの中で、ケベックの文脈を超えた普遍的な意味で「物語る者」をとらえている。「*« Je [Yves Thériault] suis un conteur dans la tradition des conteurs populaires depuis des milliers d'années, ces conteurs qui accompagnaient des tribus qui erraient dans le désert, qui ont transmis l'histoire, en même temps qu'ils créaient des toutes pièces des personnages, des épisodes »* (Smith, 1980, p. 53).
 - 5 一般的に、テリオールの「原初性 (primitif)」は以下2つの意味で用いられる。1つ目は、『アガグック』や『アシニ (*Ashini*)』(1960)を代表作として、僻地に生きる先住民の物語を数多く書いている(また、作家によれば、彼自身も先住民の血を引いている)ことから、文明を象徴する西洋社会との比較の中で理解されるような始原的な世界観とむすびついている。2つ目は、現代の社会生活において規範化され抑圧された人間の欲望や夢意識を読解する姿勢に関わる (Besette, 1968)。本稿では、ケベックおよび西洋社会の枠を超えて、人間社会の営みの根源にあるものという意味の普遍性として用いる。
 - 6 ロックはドルメールの家に2階の窓から侵入し、寝込みを襲い、実際に発砲するが的は外れる。慌てたロックは窓から落ちて足を骨折する。なお、ほとんどの物語において、各登場人物はどのように何かしらの騒ぎを起こすが、最終的に元の鞘に戻り、事態は収束される。これは、作品の構成面からいえば、終盤のどんでん返しには必要なことだろう。つまり、村にエルマンが登場する第1章から始まり、第2章から第14章にかけて各登場人物の反応が描かれ、最終章ではもう一度村人が集まる状況が作られて、エルマンは去る。クマ使いは村の中心で大芝居を打ち、村人から金を巻き上げて高飛びするのである。
 - 7 商人の妻で、村で唯一教養のある女性リユットもエルマンと一緒に去りたいと願うように、『クマ使い』において、日々のさまざまな習慣や規則、規範から自由になることを欲するのは女性登場人物である。その自由の有様を、女性たちはエルマンの肉体が表象する情欲とむすびつけている。1950年代に、テリオールほど、女性の置かれた地位に目を向けた男性作家はいないだろう。
 - 8 ルイは、エルマンが村にやってきた最初の晩に散歩中、そのように千思万考

した後、思い立ってそのまま村の外にでる。しかし、翌日父親に連れ戻される。ただ、物語の最後、「だいたい後になって、今度はしっかりと準備して、トラックに乗り込んで」(p. 58)、村からの脱出に成功するという結末がつけ加えられている。テリオールにおいて、実際に社会集団のしがらみから自由を得る人物は、ルイのように自分で思考し行動に移す賢い者だといえる。たとえば、後の『アガグック』でも、イヌイット社会から脱して自由に生きる主人公とその妻は、彼ら自身で果断できる者である。

- 9 この点について、エルマンがクレマンにたいして次のように述べていることから、テリオールにおけることばへの複雑な感情を読みとることができる。「おまえの純粋な瞳。これまでも一度も…一度も偽りのことばを目にしたの瞳、嘘を直視したことのない瞳。おまえは嘘をつけないだろう？」(p.136)。
- 10 この点について、テリオールの多くの作品で会話場面が豊富に見られ、登場人物たちが頻繁に言い合うことが指摘できる。
- 11 紙面の都合上、本稿で取り上げられなかったヴァニエル家 (Vaniel) とエリーズ (Élise)、デュラン神父 (Curé Dulin)、アデル (Adèle) については稿を改めて考察したい。
- 12 『クマ使い』は、実際にテリオール自身がモンテレジー地方 (Montréal) の村で見た出来事から着想を得た物語である。村の女性群は、洗練された美男と言うには程遠いクマ使いの男に、よそ者で肉体的にたくましいというだけで、心酔したという (Smith, 1980, p. 55)。
- 13 『クマ使い』では実際に動物と対峙することはないが、そのイメージは、後のテリオールの作品においてより具現化されていく。再び『アガグック』を例にとると、主人公は白い狼と闘う。そのほか、『マイガン (Mahigan)』(1968)でも狼、『ケステン (Kesten)』(1968)では馬である。この現象について現段階で考えられるのは、テリオールにおいて動物は人間の理解も力も及ばない生の暴力性を表象し、いわば人間が人間である限り解消しえない自然との間の亀裂をあらわしているのだらうということである。
- 14 同引用は以下のように続く。テリオールにおいて、「ケベック人である」ことは、何よりも日々を生きる人間であることなのである。「Je parle du Québec depuis que j'écris, car je suis québécois, mais j'en parle à ma façon et lorsque bon me semble」(Thériault, 1969, p. 26)。

参考文献

- BEAULIEU, Victor-Lévy (1996) « Préface : Pour célébrer la beauté du conteur », dans Yves THÉRIAULT, *Valère et le grand canot*, Typo, pp. 7-27.

- BESSETTE, Gérard (1968) « Le primitivisme dans les romans de Thériault », dans *Une littérature en ébullition*, Éditions du Jour, pp. 109-216.
- LAFRANCE, Hélène (1984) *Yves Thériault et l'institution littéraire québécoise*, Institut québécois de recherche sur la culture.
- MARCOTTE, Gilles (1950) « *La fille laide* d'Yves Thériault », *Le Devoir*, 11 mars, p. 8.
- MARCOTTE, Gilles (1951) « *Le Dompteur d'ours* par Yves Thériault », *Le Devoir*, 10 février, p. 8.
- MAJOR, André (1983) « Yves Thériault. Se mesurer avec le langage comme avec la vie elle-même », *Le Devoir*, 29 octobre, p. 17.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学』 岩波現代文庫。
- SIMARD, Jean-Paul (1979) *Rituel et langage chez Yves Thériault*, Fides.
- SMITH, Donald (1980) « Yves Thériault : Prix David 1979 », *Lettres québécoises*, n°17, pp. 51-59.
- THÉRIAULT, Yves (1969) *Textes et documents*, Leméac.
- THÉRIAULT, Yves (2005) *Le Dompteur d'ours*, Le dernier havre. Édition originale : Le Cercle du Livre de France, 1951.
- THIBEAULT, Jimmy (2019) « Se dire autrement dans l'espace social chez Yves Thériault, ou l'écriture du trouble dans *Le Dompteur d'ours* », dans Renald Bérubé (dir.) *Cahiers Yves Thériault 2*, Le dernier havre, pp. 161-192.